

第1章 遺跡の概観

1. 遺跡の位置・地理的環境

宮城県塩竈市は仙台市の北東に位置し、東側海上の浦戸諸島（松島湾の入り口にある島嶼群）も塩竈市に帰属する（第1図、図版1）。浦戸諸島には多くの島があり、有人島の桂島、野々島、寒風沢島、朴島や230余りの無人島の他、暗礁に近いものを含めると300近くになる。七ヶ浜半島（七ヶ浜町）から桂島、野々島、寒風沢島、朴島、宮戸島（東松島市）と橋のように連なり、松島湾の景観は「八百八島」と呼ばれている。こうしたことから、これら諸島は松島湾の防潮堤の役割を果たしている。

松島湾の地層の形成は新生代中新世にさかのぼる。約2,300万年前、日本列島の広い地域にわたって火山活動が活発になり、松島湾周辺でも溶岩、火山砕屑岩、火山灰が堆積した。これらは陸地のみならず周辺の浅海にも堆積し、シルト岩などの砕屑岩と互層を形成している。約18,000年前、第四紀最後の氷期には、海水面が現在より100mほど低く、松島湾全体が丘陵地のような状態であった。その後、地球の温暖化とともに海水面は徐々に上昇し、縄文時代前期に当たる約6,800年前には現在とほぼ同じ高度に達し、丘陵が海面下に沈下し尾根の部分だけが島として残り、現在見られる松島湾の多島海の景観が出現したと考えられている。この多島海と白い岩肌、松林が青い海に映える景観は、その価値が評価されて昭和27年（1952年）に国の特別名勝に指定されている。

2. 歴史的環境

塩竈市における周知の遺跡は、縄文時代から近世まで84箇所が知られ、半数以上の45箇所が浦戸諸島に所在している（図2・7・17）。

松島湾と人々との関わりは深く、その開始は湾が形成された縄文時代にさかのぼる。沿岸や島嶼にはこの時代の人々の生活の痕跡を示す貝塚が多く分布する。代表的な貝塚には、拠点的な大遺跡である史跡里浜貝塚（東松島市）をはじめ、豊富な土器の出土から縄文土器編年の標準遺跡である史跡大木団貝塚（七ヶ浜町）や史跡西の浜貝塚（松島町）がある。これらの貝塚は遺物の保存状態がよく、長期間にわたる縄文人と自然との関わりを知る上で重要な遺跡となっている。いずれも定住的な大規模遺跡を中心に径3～4kmの領域をもち、3つの縄文のムラが共存していたと考えられる。

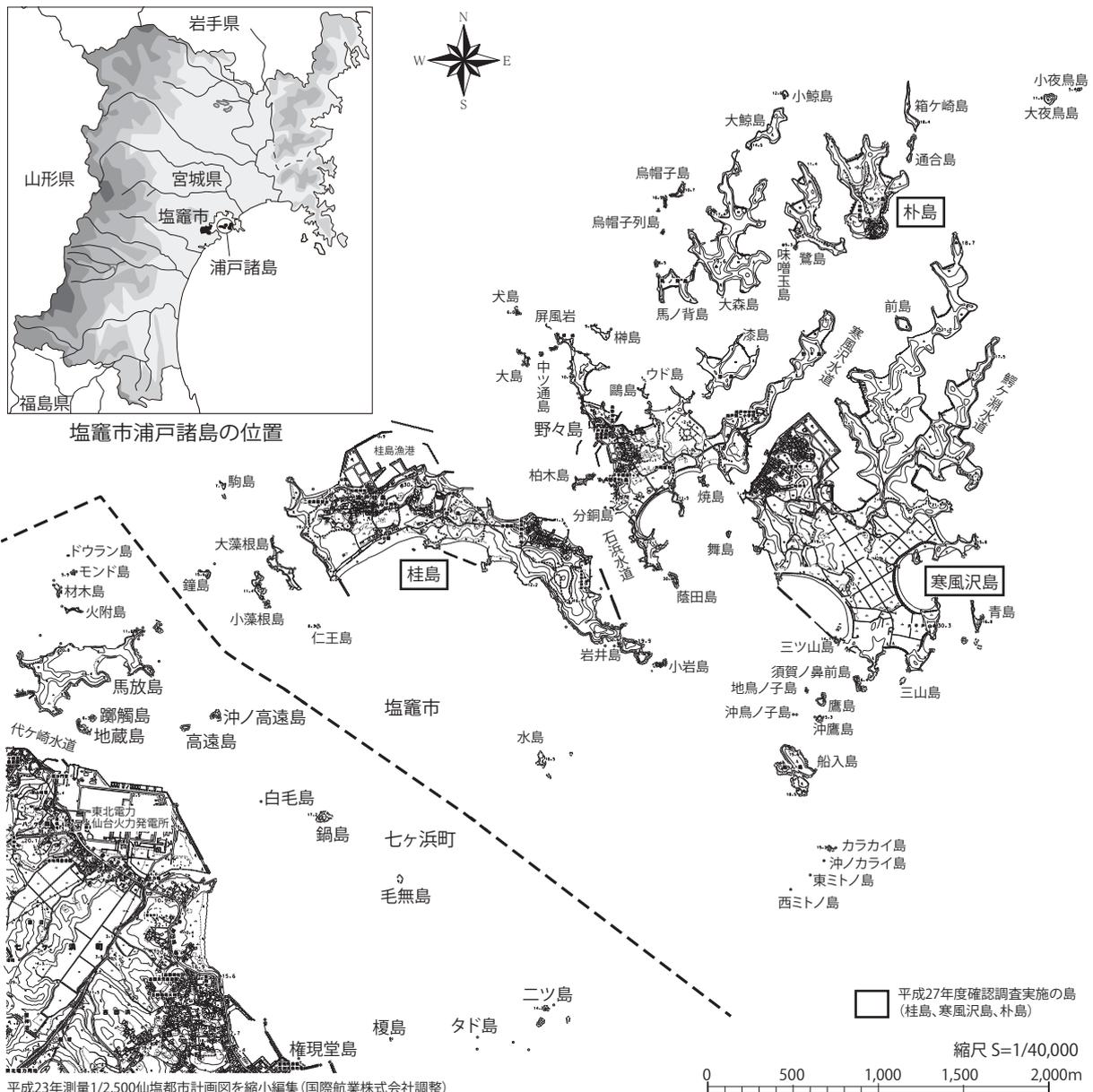
塩竈市の縄文時代貝塚は、早期～中期の船入島貝塚、早期の野々島貝塚、前期・中期の桂島貝塚、中期の浦戸貝塚、晩期の葉ヶ崎貝塚と内裡島A貝塚があり、いずれでも貝層が確認されている。狩猟、漁撈、採集を中心とした縄文人にとり、松島湾が生産性の高い豊かな森と漁場に恵まれた生活の場であったと考えられる。

塩竈市で製塩土器が出土又は採集された遺跡は、桂島で梅ヶ浜貝塚など2遺跡、野々島で葉ヶ崎貝塚など11遺跡、寒風沢島で寒風沢元屋敷貝塚など14遺跡、朴島で朴島宅地遺跡など5遺跡、その他の島で馬背島貝塚など11遺跡、本土地区で新浜B遺跡など7遺跡である。奈良・平安時代になると松島湾の島々のほとんどの入江で土器による製塩が行われており、松島湾が製塩工場地帯とも言える様相を示している。古代の松島湾沿岸は、国府である多賀城の管理下、軍事用の塩を供給する一大生産地であった



塩竈市浦戸振興課提供

図版1 西上空から見た浦戸諸島



第1図 浦戸諸島の位置

と考えられ、松島湾の製塩と国府である多賀城が密接な関係にあったことが伺える。この塩の生産は、「塩竈」の地名や、「鹽竈神社」の由来につながったと考えられる。

中世では瑞巖寺（松島町）の前身である円福寺が『一遍上人絵伝』に登場し、当時偉容を誇った大伽藍の様子を知ることができる。また中世以降においては、「奥の高野」として知られる雄島（松島町）を中心とした霊場松島が展開し、重要な信仰上の舞台となっている。

近世では仙台藩主伊達家の菩提寺である瑞巖寺（松島町）は桃山建築の典型を今に伝え、その佇まいは五大堂（松島町）とともに松島とは切り離せない重要な景観の一つとなっている。また、松島は安芸の宮島（広島県）、天橋立（京都府）とともに日本三景の一つに数えられ多くの文人・墨客を迎えている。

3. 浦戸諸島におけるこれまでの発掘調査

浦戸諸島で行われた発掘調査の報告がされている遺跡は、桂島、野々島、朴島、船入島の4島で、5遺跡である。以下に、各遺跡におけるこれまでの発掘調査について概説する。

桂島では、梅ヶ浜貝塚、桂島貝塚で発掘調査が行われている。

梅ヶ浜貝塚は、北部の浜辺に立地し、背後に桂島貝塚の丘陵がせまる。遺跡の西と東に面積10㎡ほどの小規模の貝層を分布する。昭和41（1967）年に塩釜女子高校社会部が東北地方における古代人の生活を究明するために発掘調査を行い、平安時代の製塩遺構と多数の製塩土器を検出した（塩釜女子高等学校社会部1968）。

桂島貝塚は、貝層が北・東・西・南斜面の4箇所分布が確認され、環状貝塚の一種とみられている。北斜面の貝層は古くから知られており、昭和27（1952）年に塩竈市史編纂委員会が市史編纂のために発掘調査を行い、アサリ・シオフキ等、縄文時代前期（室浜式、大木1式）や縄文時代中期（大木8b、大木9式）の土器が多数出土した（佐藤達夫1953、加藤孝1957）。この縄文時代前期の土器を利用し、前期の「桂島式」が提唱されている（林謙作1960）。昭和46・48・49（1971・1973・1974）年に塩釜女子高校社会部が、仙台湾貝塚群の漁撈生活文化を究明するために発掘調査を行った。北側の急斜面を調査し、斜面上部の壁面で厚さが90cmある貝層（推定面積30×20m）は、スガイ・アサリが主体で、魚骨の混入が非常に多く、縄文時代前期（大木1式）の土器が出土し、マダイ漁中心の漁撈活動が営まれていたと考えられている（後藤勝彦2006）。東斜面の貝層（面積10×10m）は発掘調査が実施されておらず、詳細は不明である。西側の貝層（面積20×20m）では、昭和38（1963）年に旧浦戸第二小学校移転・新築に伴う発掘調査が行われている。貝層はキサゴ・アサリを主とした厚さ20cmで、縄文時代中期（大木8b式と大木9式の間中式）の完形品が出土した（塩竈市教育委員会2010、後藤勝彦2014）。この調査より一段低い南に位置する緩斜面では、平成24（2012）年に災害公営住宅1期分建設に伴う発掘調査が行われている。レイシガイ・スガイ・アサリを主とした貝層（推定面積5×17m）、厚さ25cmを検出した。縄文時代中期（大木10式後半期）ないしは縄文時代後期（門前式・南境式）の土器が出土した（宮城県教育委員会2014）。

野々島では、昭和62（1987）年に葉ヶ崎貝塚で既存堤防の改修に伴う発掘調査が行われている（宮

城県教育委員会1989)。葉ヶ崎貝塚は野々島北東端近くの東側に存在するカキ・アサリを主とした小規模な貝塚であり、奈良・平安時代の土師器・須恵器・製塩土器が散布する。堤防改修に伴う発掘調査では、縄文時代晩期や弥生時代中期の土器、奈良・平安時代の土師器・須恵器・製塩土器の破片が、崩落した貝塚の貝層が海水の進退を受けながら堆積した2次堆積層から混在して出土した。

朴島では、平成24（2012）年に朴島宅地遺跡で災害公営住宅建設に伴う発掘調査が行われている（宮城県教育委員会2014）。標高6～10mの丘陵際では10世紀前葉の灰白色火山灰（十和田火山を給源とする十和田a火山灰）を挟んで平安時代の遺物包含層（推定面積50×40m）を確認した。入江の最奥部の丘陵際に形成された遺物包含層からは製塩土器のほか、製塩炉に伴うとみられる被熱礫が出土したことから、製塩遺構の存在する可能性を指摘している。また、北側に隣接する丘陵部の広範囲にわたり古代の土器が散布しており、丘陵部に集落の存在を想定している。

その他の無人島では、船入島貝塚で昭和初期に学術調査が行われている。船入島貝塚は寒風沢島の南西に位置する周囲1km弱の無人島である船入島のほぼ中央部に存在する。発掘調査では繊維の混入した古式縄文土器と埋葬されたとみられる人骨を検出した（山内清男1930、斉藤忠1930）。貝層下の黒土層からは口縁部に撚糸の圧痕を有し、その下に斜行縄文を有し、裏面に条痕を有する縄文時代早期（船入島下層）の尖底土器を出土し、貝層からは縄文時代前期（大木1・2・5・6）の土器を出土した（伊東信雄1981）。他には縄文時代中期（大木7a、7b）の土器、平安時代初期（表杉ノ入式）の土師器もみられる（加藤孝1957・1960）。以前はハマグリ・カキが主体の貝層（面積40×30m）が良好なところで厚さ50cmほど確認されていたが、風雨や波浪等の影響で浸食され、現在は厚さ数cmの貝層が散見されるのみである。

寒風沢島では、これまで公式の発掘調査報告は行われていない。